

修士論文（要旨）

2014年1月

大学生のセルフ・ハンディキャッピングに及ぼす
自尊感情と自己概念の安定性及び特性不安の影響

指導 井上 直子 教授

心理学研究科
臨床心理学専攻
212J4003
井上恵利佳

目次

I ー問題の背景と所在	
1 セルフ・ハンディキャッピング	1
2 自尊感情とセルフ・ハンディキャッピング	6
3 自己概念の安定性とセルフ・ハンディキャッピング	8
4 特性不安とセルフ・ハンディキャッピング	10
5 青年期におけるセルフ・ハンディキャッピング	11
II ー目的	12
III ー方法	
1 調査対象	12
2 調査方法	12
3 質問紙	12
(1) セルフ・ハンディキャッピング	13
(2) 自尊感情と自己概念の安定性	15
(3) 特性不安	15
(4) フェイスシート	15
4 分析方法	15
IV ー結果	
1 基本統計	16
2 性差の検討	17
3 相関分析	18
V ー考察	
1 各変数における性差について	
(1) やれない因子の性差	20
(2) やらない因子の性差	21
(3) 自尊感情の性差	21
2 セルフ・ハンディキャッピングと諸指標の関連について	
(1) やれない因子を中心とした諸指標の関連	22
(2) やらない因子を中心とした諸指標の関連	23
VI ー総合考察と今後の課題	
1 総合考察	24
2 今後の課題	25
謝辞	26
引用文献	27
資料	

I.問題の背景と所在・目的

セルフ・ハンディキャッピング（以下 SH と略す）とは、「遂行によって自己の能力が明確になる領域で、不適切な遂行の結果、自尊感情の低下が予期される場合、なんらかの問題・弱点・欠陥があることを表面的に自ら認めるような特性や行為を採用する過程」（Snyder&Smith,1982）と定義されている（沼崎・小口,1990）。この SH を分類する試みの中に、沼崎・小口（1990）が抽出した統制可能性（統制不能－統制可能）という次元で捉える「やれない因子」と「やらない因子」がある。やれない因子は、所期の目的に向かって行動しようと思っても、統制不能なんらかの障害があるためにできないことを表し、やらない因子は、所期の目的に向かって行動しようとはしないことを表している。本研究では、以降、統制可能性の 2 つの次元を「統制不可能－可能」と表記する。また、SH は自尊感情維持を目的とする方略としても知られ、SH と自尊感情との関連について多くの研究がなされてきたが、SH と自尊感情の関係について、これまで一貫した結果は見出されていない。伊藤（1991）によると Harris&Snyder（1986）の研究では、被検者に自尊感情尺度の回答に対する確信度を回答させたところ、自尊感情の高さに関係なく、自己概念の不安定な男性被検者がテスト前の意図する努力量の報告も実際の練習量も少ないことを見出した。また SH 採用の有無は、自尊感情の高低ではなく、自己概念の安定性によって、左右されることが示唆されている（e.g.Harris&Snyder,1986; 龍・氏原・上田・小川内,2002）。そして、金子・高木（2008）は、気持ちの不安定性や不安な精神状態が SH 採用の有無に強く影響していることを明らかにし、SH の採用を規定する個人特性として不安に焦点を当てていくことは意義のあることだろうと示唆している。

そこで本研究では、大学生を対象とし、SH を統制不可能－可能の次元で捉え、自尊感情と自己概念の安定性及び特性不安との関連を検討することを目的とする。そして（1）セルフ・ハンディキャッピングの採択に関連する要因について性差がある、（2）自尊感情が低く、自己概念が不安定で特性不安の高い人は、統制可能なやらない因子のセルフ・ハンディキャッピングを採択する、との仮説に立ち、研究を進める。（1）については、仮説の方向が定められていないため探索的に検討する。

II.方法

調査対象者は、都内某私立大学に在籍する 1 年生から 4 年生の男女を調査対象とし、質問紙調査を行った。回答者 333 名のうち、有効回答者 256 名が、本研究の分析対象となった。性別の内訳は男性 100 名、女性 156 名の平均年齢 20.1 歳、標準偏差は 1.28 である。質問紙の構成は以下の通りである。

- 1) SH を統制不可能 - 統制可能の次元ではかるための尺度：セルフ・ハンディキャッピング尺度 [沼崎・小口,1990] 23 項目（やれない因子とやらない因子から構成されている）
- 2) 自尊感情と自己概念の安定性をはかるための尺度：自尊感情尺度 [Rosenberg,1965（山本・松井・山成,1982）] 10 項目およびその確信度 4 段階評価

3) 特性不安をはかるための尺度：新版 STAI 状態－特性不安検査 [肥田野・福原・岩脇・曾我・Spielberger,2000] のうち特性不安に関する 20 項目

4) 対象者が青年期に該当するかどうかを確認するため：年齢・性差の検討のため：性別
得られたデータは、統計的手法を用いて調査結果を分析した。なお、分析には統計解析ソフト SPSS ver19.0 を使用した。SH について沼崎・小口（1990）によって分類された、やれない因子とやらない因子の各得点と自尊感情、自己概念の安定性、特性不安の各得点を算出した。性差の検討のために、算出した各因子と各変数の得点から、平均値の差の t 検定を行った。次に、各因子と各変数の間にどの程度、関連があるかを検討するために、男女別に相関分析を行った。

III.結果

性差の検討を行った結果、やれない因子とやらない因子は男性よりも女性の方が有意に高い平均得点を示し、自尊感情は女性よりも男性の方が有意に高い平均得点を示した。そして、男女別に各因子・変数間の関連を検討するために、Pearson の相関係数を算出した結果、男女ともにやれない因子について、自尊感情との間には負の相関がみられ、特性不安との間には正の相関がみられた。また、男性はやらない因子について、自尊感情との間に有意な負の相関がみられ、特性不安との間に正の相関がみられた。一方で、女性はやらない因子といずれの指標との間にも有意な相関はみられなかった。

IV.考察

性差に関しては、やれない因子とやらない因子、そして自尊感情において有意な差がみられた。つまり、仮説 (1) は一部、支持された。

そして、SH のやれない因子とやらない因子それぞれにおける諸指標の相関について、男性の場合、統制可能性（統制不可能－可能）のどちらの SH を採択するに際しても、諸指標との相関の在り方に違いはなく、やれない因子とやらない因子を採択する人は、自尊感情が低く、特性不安が高い人であることが明らかになった。つまり、男性の場合には、SH を採択することと、自尊感情や特性不安の間には関連が見られることを示唆した。ただし、統制不可能－可能の次元のいずれの因子の SH を採用するか、本研究で用いた諸指標からは見極められず、統制不可能－可能の次元による違いを生み出す要因については、明らかにならなかった。

一方で、女性の場合、やれない因子を採択する人は、自尊感情が低く、特性不安が高い人であることが明らかになったが、やらない因子を採択する場合には、男性や、やれない因子と諸指標との相関の在り方とは異なることが示唆された。やらない因子は、自尊感情や特性不安との関連が見られず、他に関与している要因があると考えられるが、今回の研究では明らかにはならなかった。しかし、女性の場合には、統制不可能－可能の次元のいずれの因子の SH を採択するか、その次元による違いを生み出す要因が何かについては、一つの可能性として、今回、用いた自尊感情や特性不安が挙げられる可能性が示唆された。

よって、本研究の仮説 (2) は男性の場合、自己概念については支持されず、それ以外は支持され、女性の場合は支持されないという結果になった。

引用文献

- 安藤清志（1987）．帰属過程と「自己」ーセルフ・ハンディキャッピングの研究動向からー 対人行動学研究 第6巻 pp.21-35
- 安藤清志（1990）．「自己の姿の表出」の段階 中村陽吉（編）（自己過程）の社会心理学 東京大学出版会
- 安藤清志（1997）．見せる自分／見せない自分 自己呈示の社会心理学 サイエンス社
- Arkin,R.M.,&Baumgardner,A.H.（1985）．Self-handicapping. In J.H.Harvey & G.Weary(Eds.), Attribution : Basic issues and applications. New York : Academic Press. pp.169-202. 沼崎誠・小口孝司（訳）（1990）．大学生のセルフ・ハンディキャッピングの2次元 社会心理学研究（5）42-49
- 東清和・小倉千加子（2000）．ジェンダーの心理学 早稲田大学出版部
- 足立にれか・庄賀直子・坂元章（1999）．セルフ・ハンディキャッピングと帰属スタイルー行動指標を用いた実験 性格心理学研究 第8巻 第1号 76-77
- Cattell,R.B.（1966）．The scree test for the number of factors. *Multivariate Behavioral Research*, 1, pp.245-276. 東清和・小倉千加子（訳）（2000）．ジェンダーの心理学 早稲田大学出版部
- 遠藤辰雄（1985）．自己と自我 遠藤辰雄（編）アイデンティティの心理学 ナカニシヤ出版
- 遠藤辰雄・井上祥治・蘭千壽（1992）．セルフ・エスティームの心理学 自己価値の探求 ナカニシヤ出版
- 遠藤俊郎・袴田敦士・安田貢・布施洋・伊藤潤二・田部井政規（2009）．中学生のスポーツ活動におけるセルフ・ハンディキャッピングの関連性 山梨大学教育人間科学部紀要 11 pp.126-133
- 藤島喜嗣（2002）．自己高揚的自己呈示が自己評価とセルフ・ハンディキャッピングに与える効果 昭和女子大学生生活心理研究所紀要 vol.5 pp.13-26
- Harris, R.N.,&Snyder.C.R.（1986）．The role of uncertain self-esteem in self-handicapping. *Journal of Personality and Social Psychology*, 51, 451-458. 伊藤忠弘（訳）（1991）．セルフ・ハンディキャッピングの研究動向 東京大学教育学部紀要 31, 153-162.
- Harris,R.N.,Snyder,C.R.,Higgins.R.L.,&Schrag.J.L.（1986）Enhancing the prediction of self-handicapping . *Journal of Personality and Social Psychology*, 51, 1191-1199. 伊藤忠弘（訳）（1991）．セルフ・ハンディキャッピングの研究動向 東京大学教育学部紀要 31, 153-162.
- Heider,F.（1958）．The psychology of interpersonal relations. Wiley. 遠藤辰雄・井上祥治・蘭千壽（訳）（1992）．セルフ・エスティームの心理学 自己価値の探求 ナカニシヤ出版
- 肥田野直・福原眞知子・岩脇三良・曾我祥子・Chales D. Spielberger（2000）．新版 STAI マニュアル 実務教育出版

- 井上祥治（1985）.自尊感情の測定 遠藤辰雄（編）アイデンティティの心理学 ナカニシヤ出版
- 井上祥治（2008）.自尊感情と自己概念の明確性および時間的安定性 岡山大学教育実践総合センター紀要 第8巻 pp.73-80
- 伊藤忠弘（1991）.セルフ・ハンディキャッピングの研究動向 東京大学教育学部紀要 31, 153-162.
- 伊藤忠弘（1993）.セルフ・ハンディキャッピングの状況的規定因に関する研究 実験社会心理学研究 33 pp.41-51
- 伊藤忠弘（1994）.セルフ・ハンディキャッピングの統制可能性・安定性および形態が観察者の印象に及ぼす影響 社会心理学研究, 10, 24-34.
- Jones,E.E.,&Berglas,S.（1978）.Control of attributions about the self through self-handicapping strategies : The appeal of alcohol and the role of underachievement. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 4 , pp.200-206. 安藤清志（訳）（1987）.帰属過程と「自己」-セルフ・ハンディキャッピングの研究動向から- 対人行動学研究 第6巻 pp.21-35
- Jones,E.E.,&Pittman,T.S.（1982）.Toward a general theory of strategic self-presentation. In J.Suls(Ed.), *Psychological perspectives on the self*. Vol.1. Lawrence Erlbaum Associates. 藤島喜嗣（訳）（2002）.自己高揚的自己呈示が自己評価とセルフ・ハンディキャッピングに与える効果 昭和女子大学生活心理研究所紀要 vol.5 pp.13-26
- Jones,E.E., Rhodewalt,F., Quattrone,G., &Pittaman, T.,（1986）.Self-Handicapping Scale. Unpublished manuscript. 沼崎誠・小口孝司（訳）（1990）.大学生のセルフ・ハンディキャッピングの2次元 社会心理学研究(5) 42-49
- 梶田叡一（1988）.自己意識の心理学 第2版 東京大学出版会
- 梶田叡一（2006）.自己意識研究の現在 ナカニシヤ出版
- 金子茉莉・高木秀明（2008）.場面想定法によるセルフ・ハンディキャッピングの測定と尺度の再検討 横浜国立大学教育相談・支援総合センター研究論集 (8), 25-41.
- 北村讓崇（2011）.青年期における自尊感情の変動性と関係的自己の可変性との関連 人間・環境学 20 pp.1-11
- Leary,M.R.（1994）.The interplay of private self-processes and interpersonal factors in self-presentation. In J. Suls(Ed.), *Psychological perspective on the self*. Vol.4. Lawrence Erlbaum Associates. pp.127-155. 安藤清志（訳）（1987）.帰属過程と「自己」-セルフ・ハンディキャッピングの研究動向から- 対人行動学研究 第6巻 pp.21-35
- Leary,M.R.,&Kowalski,R.M.（1990）.Impression management : A literature review and two component model. *Psychological Bulletin*, 107, pp.34-47. 馬淵香江・廣岡秀一（訳）（1998）.観測者の存在がセルフ・ハンディキャッピング方略に及ぼす効果 三重大学教育学部研究紀要 第49巻 教育科学 pp.115-125

- Leary,M.R.,&Miller,R.S. (1986) . Social psychology and dysfunctional behavior : Orgins, diagnosis, and treatment. Springer – Verlag. 安藤清志・渡辺浪二 (訳) 1989 不適応と臨床の社会心理学 誠信書房
- Leary,M.R.,&Shepperd,J.A. (1986) . Behavioral self-handicaps versus self-reported handicaps : A conseptual note. Journal of Personality and Social Psychology , 51, pp.1265- 1268. 伊藤忠弘 (訳) (1991) . セルフ・ハンディキャッピングの研究動向 東京大学教育学部紀要 31, 153-162.
- 馬淵香江・廣岡秀一 (1998) . 観測者の存在がセルフ・ハンディキャッピング方略に及ぼす効果 三重大学教育学部研究紀要 第49巻 教育科学 pp.115-125
- 丸本奈央 (2006) . 進路目標に向けて失敗を予期した時に喚起される感情の構造と特徴について—セルフ・ハンディキャッピングを生起させる Resource— 関西大学大学院人間科学；社会学・心理学研究 (65) pp.221-235
- 丸本奈央 (2009) . 自尊感情の不安定性とセルフ・ハンディキャッピングの情動制御効果—状態不安との関連— 日本パーソナリティ心理学会大会発表論文集 (18), 120-121.
- 森年雅子・伊藤豊彦 (2010) .スポーツにおける目標志向性とチームの動機づけ構造がセルフ・ハンディキャッピングに及ぼす影響 島根大学教育学部紀要 教育科学・人文・社会科学・自然科学 44 49-57
- 無藤隆・佐久間路子・若本純子 (2006) .自己意識はどのように育っていくのか 内田伸子編 発達心理学キーワード 有斐閣 pp.145-168
- 沼崎誠 (1993) .セルフ・ハンディキャッピングが受け手に与える印象 日本心理学会第 57 回大会発表論文集 p.136
- 沼崎誠・小口孝司 (1990) . 大学生のセルフ・ハンディキャッピングの 2 次元 社会心理学研究(5) 42-49
- 沼崎誠・和田万紀 (1990) . “いいわけ” が受け手に与える印象—セルフ・ハンディキャッピング的 “いいわけ” — 日本心理学会第 54 回大会発表論文集 p.159
- Rosenberg,M. (1965) . Society and the adolescent self-image. Princeton : Princeton Univ. Press. 梶田叡一 (訳) (2006) . 自己意識研究の現在 ナカニシヤ出版
- 龍祐吉・氏原隆・上田麻由・小川内哲生 (2002) .大学生のセルフハンディキャッピングに及ぼす達成目標と自尊感情の影響 中京女子大学研究紀要 (36), 45-55.
- Shavelson,R.J.,Hubner,J.J.,&Stanton,G.C. (1976) . Self-concept : Validation of cconstruct interpretation. Review of Research,46, pp.407-441. 遠藤辰雄・井上祥治・蘭千壽 (訳) (1992) .セルフ・エスティームの心理学 自己価値の探求 ナカニシヤ出版
- Smith,T.W.,Snyder,C.R.,&Perkins,S.C. (1983) . On the self- serving function of hypocohndriacal complaints : Physicalsymptoms as self-handicapping strategies.Journal of Personality and Social Psychology, 44, pp.787-797. 伊藤忠弘 (訳) (1991) . セルフ・ハンディキャッピングの研究動向 東京大学教育学部紀要 31, 153-162.

- Snyder,C.R. (1990) . Self-handicapping processes and sequelae : On the talking of a psychological dive. In R. L. Higgins,C.R.Snyder,&S.Berglas(Eda.),Self-handicapping : The paradox that isn't. New York : Plenum.pp.107-150. 伊藤忠弘 (訳) (1994) . セルフ・ハンディキャッピングの統制可能性・安定性および形態が観察者の印象に及ぼす影響 社会心理学研究, 10 , 24-34.
- Snyder,C.R.,&Smith,T.W. (1982) . Symptoms as self-handicapping strategies : The virtues of old wine in a new bottle. In G. Weary & H.L. Mirels(Eds.), Integrations of clinical and social psychology. New York : Oxford University Press. pp.104-127. 沼崎誠・小口孝司 (訳) (1990) . 大学生のセルフ・ハンディキャッピングの2次元 社会心理学研究(5) 42-49
- Snyder,C.R.,Smith,T.W.,Augelli,R.W.,&Ingram,R.E. (1985) .On the self-serving function of social anxiety : Shyness as a self-handicapping strategy. Journal of Personality and Social Psychology 48, pp.970-980. 伊藤忠弘 (訳) (1991) . セルフ・ハンディキャッピングの研究動向 東京大学教育学部紀要 31, 153-162.
- Spielbege,C.D.,Gorsuch,R.L.,Lushence,R.E.,Vagg,P.R.,& Jacobs,G.A. (1983) . Manual for the State-Trait Anxiety Inventory (Form Y).Palo Alto Calif : Consulting Psychologists Press, Inc. 東清和・小倉千加子 (訳) (2000) .ジェンダーの心理学 早稲田大学出版部 田中道弘 (2006) .Rosenbeg の自尊感情尺度の再検討 埼玉学園大学 人間学部篇 6 pp.135-139
- Tedeschi,J.T.,&Norman,N. (1985) . Social power, self-presentation,and the self. In B.R.Schlenker(Ed.), The self and social life. McGraw-Hill. 安藤清志 (訳) (1997) . 見せる自分/見せない自分 自己呈示の社会心理学 サイエンス社
- Tice,D.M.,&Baymeister,R.F. (1990) .Self-esteem, self-handicapping ,and self presentation The strategy of Inade quate practice. Jornal of Personallity 58, pp.443-464. 伊藤忠弘 (訳) (1991) . セルフ・ハンディキャッピングの研究動向 東京大学教育学部紀要 31, 153-162. 豊田加奈子・松本恒之 (2004) .大学生の自尊心と関連する諸要因に関する研究 東洋大学人間科学総合研究所紀要 創刊号 pp.38-54
- Weary,G.,&Mirels,H.L (Eds.) (1982) . Integration of sosial and clinical psychology. New York : Oxford University Press. 安藤清志 (訳) (1987) . 帰属過程と「自己」-セルフ・ハンディキャッピングの研究動向から- 対人行動学研究 第6巻 pp.21-35
- Weiner,B., (1979) . A theory of motivation for some classroom experiences. Journal of Educational Psychology, 71, pp.3-25. 遠藤辰雄・井上祥治・蘭千壽 (訳) (1992) .セルフ・エスティームの心理学 自己価値の探求 ナカニシヤ出版
- Weiner,B. (Ed.) (1974) . Achievement motivation and attribution theory . Morristown : General Learning Press. 遠藤辰雄・井上祥治・蘭千壽 (訳) (1992) .セルフ・エスティームの心理学 自己価値の探求 ナカニシヤ出版
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子 (1982) . 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30 ,64-68